

治傷寒方

◆ 麻黄加知母湯

傷寒で汗がないものを治す。

麻黄 4 銭 桂枝尖 2 銭 甘草 1 銭 杏仁（皮を去って炒る）2 銭
知母 3 銭

まず麻黄を煮て 5～6 回沸騰させて上沫を去り、諸薬を納れて煮て茶碗 1 杯を取って温服し、汗がにじむ程度に覆う。粥を啜る必要はないが、それ以外は桂枝湯と同様のやり方にして安静をとる。

麻黄湯原方に、桂枝は「去皮」とあるが、枝の表面の皮を去るという意味ではない。古人が用いた桂枝はやや尖った嫩枝〔若い枝〕であり、折ってみると内外一体で皮も芯も分離しない。皮と芯が分れる枝は取り除いて使わないので、「去皮」というのである。陳修園〔陳念祖、清代の医学者。《傷寒論浅注》など多くの著書がある〕の甥の鳴岐がかつてこのことを詳しく論じている。

《傷寒論》太陽篇中では麻黄湯は桂枝湯後に記載されるが、麻黄証は多く、桂枝証は 10 中 1～2 に過ぎない。そのうえ傷寒の病名では麻黄湯を傷寒初期治療の主方と位置づけるので、まずこれから始める。

傷寒とは寒水の気に傷れた病態である。天には寒水の気があり、冬季嚴寒の時期がこれにあたる。人には寒水の経があり、足太陽膀胱の経がこれにあたる。外感の襲来は類似したところからくるので、傷寒証はまず足太陽が管轄する背部に受ける。そこで本証初期は全身に悪寒があり、

4 第1章 処方

なかでも背部の悪寒が特に甚だしく、全身の痛みも背中から下肢にかけて最も甚だしい。脈が陰陽ともに緊であるのは、太陽は体表を防衛する陽であり、急に風寒が襲来して陽気を無理やり内陥させると、脈に入るので脈は有力で起伏^{じょうとう}豊濤の勢になる。しかし、寒気の収縮する力（すべての物体は熱すると膨張し、冷えると収縮する）で体表の衛気も緊縮されて脈動を逼圧するため、脈は起伏して波打つことができず弦直有力の象となり甚だしいと起伏のない左右にはじけたような動きになる。したがって、方中では熱性で中空の麻黄が、太陽の経に直走して皮毛に外達し、汗解にはたらいて外感の寒を除く。辛温微甘の桂枝は甘草とともに筋肉を温めて腠理を實し、麻黄を助けて寒を托して外出する。苦降の杏仁は胸中に入り降逆定喘する。原方はこの4味に止まるが、私が知母を加えたのは麻黄湯を服用後、ときとして汗が出ても寛解しないことがあり、これは発汗透邪していないからではなく、実際は余熱未清に原因があるからである。知母で^{たす}佐けて發表に清熱を兼ねると、発汗後に解さないおそれがなくなる。これは治験を重ねて有効性を確めており、仲景の方を軽々に加減したのではない。

問い：喘は肺の病であるが、太陽経は肺とは関係がないのに微喘を兼ねる証が多いのはなぜか？ **答え：**胸中も太陽の部位であり、胸中に積する大気は元来全身の衛気と息息と相通じる。衛気が寒気に拘束されると、大気が内鬱して必然的に膨張上逆し衝肺して喘を生じる。また風寒が皮毛を侵襲すると、必然的に手の太陰肺経にも入り、痰涎が肺竅に凝鬱するのでやはり喘を生じる。麻黄は手の太陰肺経にも入り、この経の風寒を散じ、さらに直接肺に入ってその鬱満を瀉す。太陽の汗を発するのは麻黄だけではないが、仲景がもっぱら麻黄を用いる理由は、足経の治薬であるとともに手経も兼顧して余すところがないからであり、これが張仲景の製方の妙である。

利小便薬で形状が中空のものは、萹蓄・木通のように発汗を兼ねることが多く、発汗薬で中空のものは、麻黄・柴胡のように利小便を兼ねることが多い。太陽経の病は往々にして太陽の腑である膀胱に及ぶ。麻黄湯は太

陽經の邪を治すが、同時に腑の邪も治す。経にある邪は汗から解し、腑にある邪も小便から解す。おのれは聡明だと思いこみ、つねに麻黄湯の代わりに他薬を用いる後世の人々には、こうした方意の考察がまだできていない。

大青竜湯〔麻黄・桂枝・炙甘草・杏仁・生姜・大棗・石膏〕は傷寒の無汗煩躁を治す。これは胸中に先行する内熱が発泄されず、ついに鬱して煩躁を生じたもので、解表薬に石膏を加えて内熱を清する。しかし、麻黄と石膏を併用するとき汗が出ないことがある。この方を用いる場合は、さらに知母を数銭加えると、その寒潤な性質で胸中に入り化合して汗を生じ、麻黄・桂枝にしたがって外達するので煩躁は自然に除かれる。

傷寒と温病では初期は異なるが終わりは同じである。その初期は違うので、傷寒では温熱薬を發表に用いるが、温病では必ず辛涼薬で發表する。陽明に伝変後は傷寒・温病のいずれも寒涼薬で治し温熱薬を用いてはならない。ここでは解表類の中から《傷寒論》太陽篇中の数方を選んで少しばかり解説を加えて編し、傷寒初期治療を初学者に学んでもらう。もともと温病とは違うが、温病の初期治療を知ることによって傷寒がはっきりわかる。傷寒の三陰の治法については、温病との違いも多いが、その証は非常に少ない。演繹すると、寒が原因で罹患した霍乱痧証もすべてこの中に包括されるように思うが、詳細をいえばきりがないので、専門的に精通したければ原書からこと細かく読むとよい。

銭天来〔清代の医家、せんてんらい銭潢せんこう。《傷寒遡源集》を著す〕は「漢の1両は現在の2銭7分。1升は現在の1合半」という。程扶生〔清代の医家〕は「古今の測定及びきよ〔黒黍〕黍から考察すると、1200黍の重さがじつは黄鍾のやく〔昔の容積の単位、合の半分〕にあたり、古代の半両が今の3銭に相当する。2ふは1合であり、古代の1両が今の6銭に相当する。1銖は1000黍の重さで今の2銭半に相当する。1銖は100黍の重さで今の2分半に相当する」という。陸九芝〔清代の医家。陸懋修、きゅうし《世補齊医書》を著す〕は「傷寒論の方の1両は今の7分6厘に相当し、1升は今の6勺7抄に相当する。麻黄湯の麻黄4両は今の2銭3分に相当し、その3分の1の7分強とすべきである。承気湯の大黄4両は今の

6 第1章 処方

3 銭に相当し、半分の1 銭5 分とすべきである」という。程氏の説では、古方の分量が多過ぎ、陸氏の説では古方の分量は少な過ぎるので、銭氏の説が最もよいように思われる。陳修園〔念祖、清代の医家。《傷寒論浅注》などを著す〕は「古方を用いる場合は、必ずしも古いやり方に拘泥する必要はないが、《傷寒論》《金匱要略》の方中の1 両は今の3 銭に換算するとよい」と述べる。

陸氏はまた、「麻黄数分で発汗し、大黄1～2 銭で燥結が下るが、これは南方の人を治療する場合で、北方の人を治療するときはそうはいかない」とも述べる。私の多年の臨床経験から麻黄は必ず2 銭用いなければ汗が出ないし、大黄は必ず3 銭用いなければ結が通じない。しかし、これも金持ちに依ることで、筋肉労働者の場合はそうではないようだ。1 年中労働に明け暮れ、どんなものでも食べ、身体が強壮な人の場合は、厳寒のときには麻黄を7～8 銭用いなければ汗が出ないことがよくあり、大便が甚だしく燥結していれば大黄を1 両余り用いなければ出ないことも多い。用薬は病に勝つことを主眼とし、そのために因時・因地・因証・因人と状況に応じて適宜変更すれば自然に病は治癒する。一つの考えに固執してはならない。

◆ 加味桂枝代粥湯

傷寒で汗があるものを治す。

桂枝尖3 銭 生白芍3 銭 甘草1.5 銭 生姜3 銭 大棗3 個 生黄耆3 銭 知母3 銭 防風2 銭

茶碗1 杯に煎じて温服し、しばらく被覆して、全身にしっかりと汗がにじむ程度にするとよい。流れ落ちるほど発汗すると、必ず病は治癒しない。冷たいもの・なまもの・こってりしたもの・肉・麺類・五辛〔ニラ・ニンニク・ラッキョウ・ウンサイ・コウサイ〕・酒・乳製品・臭いのひどいものなどの摂食を禁ずる。